

『つれつれ酔か川』について

―近世中期上方の「酔」―

田邊 菜穂子^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【キーワード】

近世文学 西村定雅 洒落本 粹談義 『徒然酔か川』

0. はじめに

西村定雅が初めて戯作を世に出したのは、天明三年（一七八三）正月のことである。不惑の年¹に刊行されたこの書はたいそう評判となり、翌々年には本書の後編という『当世まゝの川』²が板行される。寛政（一七八九―一八〇二）に入ると、『つれつれ酔か川』は再印される。四年に摺られた『つれつれ酔か川』はやはり人気を得たのだらう、八年には新作『養漢裸百貫』を発表。翌九年、『つれつれ酔か川』再々印、『養漢裸百貫』再印。これ以後も、定雅は遊里を題材とした著作を発表する。さらに、文化期（一八〇四―一八一八）には他の洒落本に序を寄せたり、本文中で『つれつれ酔か川』や定雅に触れる洒落本も現れたりするなど、この頃定雅が遊里や酔に関連する分野で一定の地位にあったことがうかがわれる。

本稿では、戯作者としての活躍の足掛かりとなった『つれつれ酔か川』を取り上げ、定雅は「酔」をどのように表現したのか明らか

にし、かつその酔論がどういった過程で形成されていったのかを検討したい。なおスイの用字について、本稿では定雅の選字に従い「酔」の字を用いることを基本としたが、引用の際は、それぞれの作品での用字に倣い、また一般的な意味で用いるときは「粹」（例：粹談義）の字を遣った。

1. 『つれつれ酔か川』

『つれつれ酔か川』³は色談義もの、粹談義ものに属する⁴。後述のように本作には『曾古左賀志』の影響が確認されるが、『曾古左賀志』もまた『当世花街談義』の流れを汲む色談義ものである。色里での遊び方、風俗を描写し、粹論を展開する。明和末以降、上方で復活、流行した色談義ものにふさわしく、『つれつれ酔か川』もまた半紙本型で刊行された。五巻五冊。天明三年^卯正月大坂塩屋喜助、京吉野屋勘兵衛、同小幡宗左衛門。「白川の流に枕する嗽石」序（以下〈序1〉）、「松菊庵の西の窓に足を投出して存在」序（以下〈序2〉）と、二つの序文を持つ。跋文は「非我」による（以下〈跋〉）。挿絵は耳鳥齋。

（1）題

題簽。に「徒然酔か川」（巻二）、「つれつれ酔か川」（巻三）、「つれつれ酔か、は」（巻三）、「つれつれすいか川」（巻四）、「つれつれ酔かか」（巻五）。〈序2〉には「徒然粹か川」。内題は各巻「つれつれ酔か川」、尾題にも同じ（ただし、巻五のみ尾題なし）。本稿では内題に従い「つれつれ酔か川」と表すこととする。

（2）著者および定雅の戯作者としての号

本書の著者は、〈序1〉に「艶好ぬし」、「跋」に「艶好法師」とある。これは言うまでもなく、徒然草の著者兼好をもじった号である。天

明五年に刊行された『当世まゝの川』は、その題簽に「〔醉ヶ川後編〕真々の川」というが、こちらの著者は「醉川子」(序)。享和四年刊『当世』嘘の川の「粹川士とやら自序」によれば、「それ粹か川てふむだ書をものせしもはや廿余年の星霜をへたり」とあり、これら一連の作が同じ著者によってなつたものと知られる。

なお『つれ／＼醉か川』が刊行されたのと同じ年、定雅は『しかた俳諧』と題する発句集を編んでいる。これは前半は戯場、後半は青楼に寄せた句をまとめたもので、「醉川舎猿猴」(内題下)の号で書かれていることから戯作として発表されたものである。その跋には「是をいま流行本心の粹木に鏤ておのか粹を銜売にしらるゝゑんかう師」といつており、定雅がこの頃「醉」を集中的に題材として取り上げていたことが窺知される。先述したように、『つれ／＼醉か川』刊行をきっかけとして、定雅は数年おきにこのような戯作を発表したり、他者の作品に序文を寄せたりした。そこで用いられた号を挙げると、次のようになる(成立時期が明らかなもののみ)。

年	作品名	号	詳細
天明三年	つれ／＼醉か川 しかた俳諧	艶好ぬし・艶好法師 醉川舎猿猴・ゑんかう師	〔序1〕「艶好ぬし」、〔跋〕「艶好法師」 内題下「醉川舎猿猴」、跋「ゑんかう師」
天明五年	当世まゝの川	醉川子	序「醉川子著真々乃加波」
寛政八年	養漢裸百貫	醉川子・粹川子	序「されば作者粹川子年頃此事をなけき」、序「粹川子」、内題下「醉川子著」
享和四年 (文化元年)	〔当世〕曾古左賀志 楽屋方言	粹川子 粹川子	序「享和よつのとし春／＼粹川子」。享和四年 ^甲 年正月吉日の刊。 序「粹川子書」。享和四年 ^乙 正月の刊。
	〔当世〕嘘の川	粹川子・粹川士	序「筆をとりしは粹川子也」、自序「粹川士とやら自序」、跋「粹川子之篇成也」、奥付「作者 洛東粹川子」。享和第四甲子孟春の刊。
	外国通唱	粹川士	本文が始まる直前に「粹川士」、甲子之陽春、通士ミルトウル序。
	〔三都戯場〕草廼種	粹川士	序「文化元年きのへ子の中元の日／＼洛の粹川士述」
文化二年	古今馬歌集	翠川士(・粹川)	古今馬歌集之大意末「粹川事 翠川士著」、序「中にも比翠川士」、跋「著粹川一部」
文化三年	遊状文章大成	翠川士	見返し「洛東翠川士著」、序「翠川士序」
文化四年	遊女大学	翠川士	序「粹川士事翠川士述」、奥付の「古今馬歌集」広告にも「翠川士著」
文化五年	足毛識。 〔旅中骨格〕脚栗毛	翠川子	初編序「翠川子」、内題下「洛東翠川子著」、叙「翠川子」
文政三年	雑士一覽	粹川士	序「粹川士」
文政七年	長唄馬歌集 花街風流解	粹川子 (翠川士)	序「粹が川の翁」、自序「粹川子」。後言「自ら粹川子と唱え、世の人粹仙人と称する入道あり」 奥付の広告に「花洛翠川士著／＼〔増補〕遊状文章大成」同著 長唄馬歌集

定雅の戲号の変遷は次のような流れを辿る。まず、徒然草をもじった最初の戯作において「兼好」を思わせる「えんかう」字は「①艶好」をあてた。同年の次作では「つれづれ酔か川」の人氣を反映させ且つ前号と音が同じである「①（酔川舎）猿猴」となる。二年後、「つれづれ酔か川」の後編を出すときには「②酔川子」となり、寛政期には「酔」「粹」が併用され始めて「③粹川子」の号が現れる。享和四年（文化元年）、今度は「子」「士」が併用されるようになり春頃より「④粹川士」という表記が出てくる。翌文化二年には「すい」の字が変わり「⑤翠川士」が用いられるようになったが、文政になり、再び「粹」の字を用いるようになり、③・④の併用「⑥粹川子／粹川士」になった。

これを参考にすれば、たとえば刊年不明の定雅戯作、「され発句」をまとめた『洒落文台』のような作品の成立時期もおおかた見当が付けられる。『洒落文台』は本文の始まる二丁表頭に「粹川士述」とあり、「粹川士」の号でなされたもの。「粹川士」の号を用いていたのは、前掲の表に拠れば、享和四年（文化元年）、そして暫く後の文政三年頃、⑥の併用期である。『洒落文台』の序文には「彼先達て出した仕方俳諧外国通唱のことく」とあり、「しかた俳諧」（天明三年）、「外国通唱」（享和四年）の流れを組んだ作風にあることをあわせて考えれば、『洒落文台』の成立は、文政期よりも『外国通唱』の出された直後、即ち享和四年春から文化二年頃と捉えるのが妥当であろう。

また『つれづれ酔か川』について、浅野三平氏⁷⁾は「もともとこの作品は『粹』を説くのが、その目的であった。（中略）自分のペンネーム酔川子を用いて作品名とした「酔か川」の「粹」思想を知るのである。」というが、「ペンネーム酔川子を用いて作品名とした」のではなく「つれづれ酔か川」が人氣を得たことによって、その後、「酔

の字を用いた号、すなわち酔川子（あるいは粹川子（士）、翠川士）といった号を用いるようになったと考えるべきであろう。

（3）序文

〈序1〉は、「天明二のとし春近き夜」に「白川の流に枕する嗽石^{そせき}」によって書かれたもの。和歌表現を多用した戯文である。序者嗽石について知るところはないが、「白川の流に枕する」は『風流酔談義』中の「北白川のあたりに」住む酔人「白梅上人」（一之巻）を意識したものか（なお、『風流酔談義』との関係については後述する）。〈序1〉では著者について、「往昔は染川の色にそみ艶書の苑にあそび。青楼といへば高嶺の雲のか、らぬ家なく。色妓といへばは、きゞのはかぬくまなく。（中略）雪山の艱難九年の面壁業すでになれり」と、「艶好ぬし」が茶屋遊びに熱心であったとする。嗽石自身についてもまた「予も蝙蝠の社中をのがれされは。忽筆を執て巻の首にしるす」といい、また序者も著者と同じく色里に遊ぶ人であった。

〈序2〉は「壬寅の冬しくれ月の夕日影／松菊庵の西の窓に足を投出して存在書之」という。壬寅は天明二年。序者存在について。存在は、「しかた俳諧」に「洛下存在主人」として「顔見世の序」を寄せている。『つれづれ酔か川』序の内容から考えれば、存在は著者定雅その人とも考えられるが、天明三年霜月朔に書かれた『しかた俳諧』序文では「これははしつくりせよと乞にまかせて漫に例の筆を鳴らしてしかいふ」と、序者と定雅とは別人の風に見せている。また、『つれづれ酔か川』では、一貫して「粹」ではなく「酔」の字を用いているのであるが、〈序2〉のみ「粹」の字を遣っていること（こゝに徒然粹か川といへる双紙五巻あり）、「漏たることは粹をきかしてみゆるし給へ」、また「大通」と書いて「すい」と読ませていることが気にかかる。いずれも『つれづれ酔か川』の中

では見られない文字遣いである。そこで、存在が定雅とは別人だと仮定した場合、どういった人物が考えられるだろうか。

たとえば龍草廬はどうであろうか。草廬は安永三年冬に彦根藩を致仕し、京に戻った。『平安人物志』によれば、天明二年頃には河東町三条下ル町に住んでいる。その草廬の号の一つに「松菊主人」がある。

このころ、定雅は東山「双林寺なる西阿弥の園のかたはらによもきの軒を結」んでいた(天明三年成か『椿亭記』)。草廬は定雅との交流も確認される。定雅の俳諧句文集『椿花文集』(天明七年正月刊)には次の句が収められている。

草廬先生かひかし山の菴へ贈る

寝なからの月居なからの初紅葉

『椿花文集』は『つれく／＼酔か川』の四年後に上梓されており、この句が詠まれた時期ははっきりしない。しかし、『椿花文集』には、安永期の俳書に載せた句の再録⁹、安永九年春に歿した兄¹⁰を悼む句(「哭美兄」)やその兄の一周忌の句(「一周春」)、天明三年一二月に没した蕪村の追悼句(「夜半翁の追悼」)、天明四年跋「から檜葉」に収載)、など安永から天明期の詠句が多く収められていることから、「寝なからの」句の成立時期、また龍草廬との交流もひとまず『椿花文集』の刊年に拘らず、安永から天明にかけてのもので考えておきたい。なお、草廬が東山に居を構えたのは、『草廬集』七編巻之一に「戊申春災後再卜幽于東山」とあるにより、天明八年春京都大火に罹災したことが機とするが、『椿花文集』は天明七年正月の刊であるから、それ以前に東山に住んでいたことになる。定雅の知人で、京の人、「松菊」という号を持ち合わせた人物と

して、龍草廬を考えてみたが、今はこれ以上の考拠を持ち合わせておらず、あくまで推論の域を出るものではない。ここではひとまず一つの案として提示するにとどめておく。

(4) 跋文

跋文は「あめあきらけきみつの春」、即ち天明三年春、非我による。非我とは、『つれく／＼酔か川』本文中に「金持自慢する客は非我の随一なり」というように、無粋なことをいう言葉。跋もまた、著者自身によるものかもしれないが、今は不明である。

(5) 本文の構成

本書は五巻五冊。各巻それぞれ二乃至三つの話で構成されている。たとえば一之巻は、二話を収める(これを本稿では便宜上(一①)、(一②)と表すこととする)。「つれく／＼酔か川」全体では、一四の節に分かれ、個々の話はその内容において独立している。なお、本書の本文は半丁に八行となっているが、各話の間には一行分の空間が設けられている。

2. 徒然草との関係

さて、『つれく／＼酔か川』が徒然草の文辞をまねた作品であることは、題からも明らかである¹¹。本文は先述の通り一四の話から成るが、その一つ一つに、徒然草の異なる段が引用されている。『つれく／＼酔か川』の各話の簡単な内容と、徒然草¹²のどの段が引用されたのかとを合わせて示せば次頁のようになる。

引用された段を徒然草掲載の順に戻すと、序・一・二・三・七・八・九・一九・二一・二二・二五・一〇七・一三七・一五七となる。途中、幾つかの抜けがあるものの、概ね序段から九段、一九段から二五段という塊があり、あとの三つは飛びとび。こうした偏りはなぜ起こったの

『つれつれ酔か川』について

卷	内容	徒然草の該当段
〈二―①〉	「つれ／＼なるまゝに」様々な色事の形。酔、酔客とは。	序段「つれ／＼なるまゝに」「一段「いでや、この世に生まれては」
〈二―②〉	「先祖の政をも忘れ」京を舞台に若い男が茶屋遊びに填まり、終には身を持ち崩す次第。	二段「いにしへのひじりの御代の」
〈二―①〉	「飛鳥川の淵瀬」無常。白人の行末。貧家の出の女が遊女として出世し、身請けされるまで。	二五段「飛鳥川の淵瀬」
〈二―②〉	「今ひとときは」京の遊女の一年。	一九段「折節の移りかはるこそ」
〈二―③〉	「よろづに呑味うすくても」茶屋遊びが下手な客、金払いの悪い客について。	三段「万にいみじくとも」
〈三―①〉	「建仁寺の陀羅尼」茶屋に長居すべきではない。	七段「あだし野の露きゆる時なく」
〈三―②〉	「芸子は声のめでたからんと」茶屋(芸子)と付き合っていくのに必要な費用。	九段「女の髪のめでたからんこそ」
〈三―③〉	「人の心迷はすこと」妓の実には注意すること。	八段「世の人の心まどはす事」
〈四―①〉	「花はさかりに」男女の間では、気ままになりすぎず、少し物に背いたようにするのがよい。	一三七段「花はさかりに」
〈四―②〉	「何事もふるきよのみそ」昔の方が風情があった。言葉遣い。	二二段「何事も、古き世のみぞ」
〈四―③〉	「月見るにこそ」人の好みは様々。替間について。	二一段「万のことは、月見るにこそ」
〈五―①〉	「女のなき世なりせば」みてくれ。町かたの小息子の行末。	一〇七段「女の物言ひかけたる返事」
〈五―②〉	「筆をとりては」納涼の日の茶屋。紋日のげなり遊び。生き金と死に金。	一五七段「筆を執れば物書かれ」
〈五―③〉	「総て酔といふものは」酔とは。	該当段なし

だろうか。

まず採用された段をみて考えられることは、定雅が執筆の際極めて自然に、座右においた徒然草の序段から順番に引用しようとしたのではないかということである。では、四段はなぜ引用されなかったのか。四段は「後の世の事、心に忘れず、仏の道うとからぬ、ころにくし」という短い段で、来世、仏道について述べた段である。次の五段は一部〈五十一①〉に引用されているのであるが、〈五十一①〉は主に一〇七段を用いて書かれており、五段が主要な典拠とは言えず、例外的である。その五段は「不幸に愁に沈める人の」理想的な生き方を示す。さらに引用されなかった段の内容を確かめると、六段は「わが身のやんごとなからんにも、まして数ならざらんにも、子といふものなくてありなん」。一〇段は「家居のつき／＼しく」。一一段は「神無月の比」、山里で行き当たった風情ある庵が、実の付いた柑子の周りをしっかりと囲っているのに興ざめする話。一二段は「同じ心ならん人と」心おきなく気持を分かち合うことの難しさ、そしてそのことよってかえって孤独を感じてしまうという内容。一三段は「ひとり灯のもとに文をひろげて見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなくさむわざなる」。一四段「和歌こそ、なほをかしきものなれ」。一五段「いづくにもあれ」旅に出ると目の覚める心地がする。一六段は「神楽こそ」神楽を扱った段。一七段「山寺にかきこもりて」仏に仕えろと心が清まるという話。一八段「人は己をつまやかにし」おごらず、蓄財せず、世を貪らないのがよいという段。二〇段は「某とかやいひし世捨人の」という短文、二三段は「衰へたる末の世とはいへど」という宮中の話、二四段は「斎王の野宮におはしますありさまこそ」。

つまり、引用されなかった段は、求道的精神が示された段、宮中や齋宮を扱った段、さらに教養など取り扱う話題が限定的で広がり

をみせない段である。即ち、徒然草の教誡的側面が色濃く示された段と言える。対して採用された段は、色ごとや男女を取り上げた段、月花などあはれを描いた段、無常を題材とした段となっている。こちらは徒然草の情味豊かな段、言ってみれば粹にも通じる姿が描かれた段であった。定雅は徒然草の序段から順番に引用しつつ、その内容によって取捨選択していったのではなからうか。二六段からあと、一〇七段は男女、一三七段は月花、男女、あはれや無常を扱っており、これまでの選定基準から逸脱するものではない。ところが例外的なのが〈五十一②〉に使われた一五七段「筆を執れば物書かれ」で、この段はその内容から考えれば不採用となつてしかるべきである。にも拘らず使用されたのは、冒頭の句によつたか。〈五十一②〉は実際、一五七段の最初の一文が使われるのみで、形だけの引用にとどまっている。

そもそも、一口に引用と言つても、下敷きとする割合は各話で異なっている。〈一一①〉、〈二一②〉は徒然草本文を丁寧を重ねてゆくが、一方で五巻は〈五十一①〉〈五十一②〉ともに、始まりの部分に徒然草を用いるのみ。他の巻に比べても随分と乱暴な使い方、五巻は慌てて書いたものではなからうかと推察するのである。

なお、この徒然草引用に関して、浅野氏は『風流酔談義』冒頭が太平記をもじった文となつてゐることを挙げ、その影響を指摘する³⁾。しかし、『風流酔談義』では太平記の冒頭部分のみ、『つれ／＼酔川の着想が必ずしも『風流酔談義』によるとは言い難い。むしろ、これより前の多くの仮名草子、浮世草子、洒落本に見られる徒然草の受容の中で、あたり前に存在し得たと思われる。

3. 定雅の酔

『つれつれ酔か川』において、定雅が示した酔の姿とは、いったいどのようなものであったか。定雅は「酔」について、

この酔をまなぶ時は。万法此内にこもりて。仏法あれば儒道有。
神秘あれば色事もあり。
〔五―③〕

総て酔といふものは茶屋遣ひをするが酔にもあらねど。まづ茶屋といふ物が。心をやはらげ人情をしる物ゆへ。茶屋狂ひに酔の名有。
〔五―③〕

といい、酔とは、本来諸道諸事にかかわるもので、茶屋遊びや色事のみに限られた概念ではないと言う。しかし、茶屋自体が「心をやはらげ人情をしる物」であり、それが酔の姿と重なる故に、茶屋遊びに夢中になるような者のうちに酔と呼ばれるような人がいる、とする。その上で、「第一酔といふ所は心持和やはらかにして。」〔五―③〕と、酔は「心持」の問題であることを言う。しかも「酔は心の持やうなれは。酔にならんとおもはゞ酔になられぬ事はあらし。」〔一―①〕とも言っており、誰もが心がけ次第で酔人となれるという。その心持は「和やはらか」であることを重視する。「やはらか」の解釈は、茶屋を「心をやはらげ」るものというのから考えれば、温和であること、おだやかで気立てのよいこと、との意であろう。さらに、「何事にも私なく。人のためばかりをおもひ。」〔五―③〕私心なく、気配りできること。そして「男女にかぎらず親父にも。丁稚にも。すかる、といふが酔。なんほ女郎にすかれても。かんしんの親父にすかれねは酔ではない。心がやはらかなばかりでも。道にそむけては。親父がすかぬ。忠孝は勿論世法の道をまもるが酔の奥意。」〔五―③〕

と、色事だけでなく、忠孝の道を外れないこと、親を怒らせることなく、家を守る必要を説く。「惣して女におもわる、斗を色好とはいはず。唯万人の心にもどかず。道にそむかぬこそ酔とも。色好ともいふべけれ。」〔二―③〕、「もちは餅屋医者はいしや。みなそれくの家業をまもり。情の道もうとからず。茶屋ぐるひもよいかげんに。」〔五―③〕と繰り返し、家業を守った上での度を過ぎない遊び方を求めるのである。

こうした定雅の記述から導かれた酔の基本的な姿をまとめれば、まず酔とは心の持ち方、考え方であつて、決して色好みの放埒な振る舞い方や身のこなし、奇抜な身形のことを指すのではない。さらに、酔はあらゆる法則、存在に通用する理想的な概念で、

・ 全ての人のことを思い、その人たちの心に逆らうことがないこと
・ 社会通念に従い、忠孝、人としての道を外れないこと
を二本柱としていけるとなる。

酔の基本的なあり方を掴んだ上で、色里で遊ぶ上での酔、酔客の姿、言わば狭義の酔をみてみよう。

誠の酔といはる、人は。仮にも太平楽はいひ出さす。こめる料理人迄にもことば誑しく。宝もあまりをします。江師。人にあたらす。愛敬あつていやみなきを。酔客とはいはれ。見てくれのよしあしこそ。生れ付なれはいか、はせん。酔は心の持やうなれは。酔にならんとおもはゞ酔になられぬ事はあらし。
〔二―①〕

文句のつけようのない客の姿である。我儘を言わず、使用人までも言葉優しく、あまりケチではなく、口上手、愛敬よく、嫌みも言わないのが酔である。変えようのない外見は気にせず、内面を琢

くことが大切なのである。より現実的、具体的な問題についても言及される。例えば茶屋遊びにお金がかかるのは当然のことで以下のように言う。

かゝるきさんしも酔の一徳。繁昌なる廊中のならひ。それをしりつゝ。権柄にあそんで置いて。其金をやらぬといふは。色好べきものゝせまじきわざなり。 (二一③)

とはいえ、やたらと金を遣えばよいというものではない。金に物を言わせるような者は、きつぱりと否定される。

金銀の威勢を鼻の先へ出して。権柄に詈るほど阿房とはみゆれ。金持自慢する客は非我の随一なり。 (一一①)

金銭の問題のほかにも、茶屋遊びには様々な注意点がある。まず、長居すべきではない。「いかにおもしろきところなればとて。七日十日も居続けば。否な穴もみえすぎてあいその尽ることこそ多かるべけれ。」(三一①)。「茶屋の初夜は宿の夜半と心得。はやう戻るこそうけよかるべけれ。さるを当世の生酔客は。早うかへらば跡の所覚束なしと。役にもたゝぬ推量愒気。」(同)、「誠に色気はなれてなれば。随分速ういて早う戻つてやるが本酔。」(四一①)という。また客が料理代を控えようと「何にもいらぬ」を繰り返して、そうはさせぬと茶屋が料理を出すという客と店の攻防を描き、「斯なつてはいやなもの。客にも茶やにも心得有たし。すべて芸子おやまも。あまりに気俵になり過ては色もなく情もあるまじ。」(同)と誡める。つまり茶屋と一定の距離を保ちつつ、色里での適切な平衡感覚を身につけ、我儘になりすぎないように注意して振る舞うのが、酔の遊

び方である。

茶屋と言えば、幫間が切つても切れないものであるが、最近の者は「およばざるはそしると。其道をしらぬゆへなり。当世酔がる客をみるに。牽頭子をまづいやがり。いや騒しいのいやみなのと。呼でも見ずからわらくち。人のいやみに気をつくは。こつちにいやみな気があるから。」(四一③)といい、「惣して牽頭子もすけばまたおもしろいもの。」(同)であるから、茶屋で遊ぶ以上は上品ぶつたり静かな場にしようと思せず、客らしく「安房」になつてたいことも楽しむのがよいという。「何事もうちわすれて。さわぐのが茶屋のならひ。たいこもちもしまぬが上手」(同)なのだ。一方、妓との付き合い方については、「有かたきものは仏の方便。おそろしきものは妓の実と心得て。この実に嘶されぬやうにするか先酔の第一。」(三一③)、「妓に騙されることよりも、妓が真剣になることを恐れるよう、説く。

さらに「何事も時折の催にまかすべし。こよひはかならず来るであろふと待っている時は。いかずにあたり。今夜は大かた来ざるまひと。おとし付て居る所へ風与往もをかし。腹の立事もまづはら立ぬがよし。知そむないことはしらねばならず。知てゐる事はしらぬかほもよし。すこし物に背てゆくがおもしろきもの。」(四一①)常に周囲の人の心を読み、少しその裏を行くような人が酔客なのである。それから、「かの水上といふ所を所望しての事ならば。あたまからやめにすべし。大方の歌妓か鉄漿付の客といふと。三ツ子が身柱の灸すゑるやうにぞ、がみ立ていやかるもの其ぬるさをもかへりみぬは。不酔とも。たはけとも」(三一②)とより細かな指示も見られる。言葉遣いについては、当世の替言葉に対して苦言を呈し、「いつれ酔がる言遣ひはかへつて酔にあらざ。」(四一②)という。

このほか、酔客が身につけるべき芸事については、以下のように

語られる。

まづ酔の心がけたきもの琴三味せん。夫もよきは。中く見く
るし。物まねも似ずはすへし。拳も下手なるは一興ありておか
し。艶書のかきやう。小みじかくきこえやすく。手などきたな
からすはしりかき。声もちよと流行歌うたふほど有て。拍子よ
く一座の附合酒の相手下戸ならぬほどはすこしのみたきものな
り。

(一一①)

因みに、ここは徒然草を踏まえた表現である。

ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、ま
た有職に公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手な
ど拙からず走りがき、声をかしくて拍子とり、いたましようする
ものから、下戸ならぬこそをのこはよけれ。(徒然草・一段)

徒然草ではこのように「人の鏡」となるほどの腕を求めているのだ
が、『つれく酔か川』では「よきは。中く見くるし」と、何事
も完璧にやりこなすことのないように勧めており、徒然草の価値観
をそのまま受け入れようとしていたわけではないことに気付く。徒
然草との思想的関係については、今は置いておき、定雅が描いた酔
について今少し見てみよう。

4. 『曾古左賀志』の影響

こうした定雅の酔論は、定雅独自の考え方なのであろうか。定雅
は『つれく酔か川』のなかで「かく云つ、くれれば。自笑が草子。

底さがし酔談義に事ふりにたれと。おなしこといはぬものにしもあ
らず。」(一一②)という。ここは、徒然草一九段の「言ひつゝくれれば、
みな源氏物語・枕草子などにごとふりにたれど、同じ事、また、今
さらに言はじともあらず。」という表現に基づいた箇所ではある
が、定雅が八文字屋系の浮世草子、『当世』曾古左賀志、『風流酔
談義』を読み、そして自分の作品が、これらと内容において似通っ
ていることを十分に意識していたことになる。そこで『つれく酔
か川』と、名前の挙がった『当世』曾古左賀志(明和七年刊、以
下『曾古左賀志』)、『風流酔談義』(安永三年刊)¹⁴とを比較してみたい。
『曾古左賀志』は、五巻五冊。やはり半紙本である。明和七年刊。
酔石翁著。あるの男の生誕から、成長し、色里での遊びを覚え、結
局身代を持ち崩す姿までを描く。最後の章はその筋から離れ、粹論
が展開される。『曾古左賀志』の成り立ちについては、『洒落本大成』
補巻に詳しいが、手短かに言えば、最後の酔論は原作である『正夢
後悔玉』に無く、書き足されたものである。では『曾古左賀志』に
おける粹とはどういったものであるか。やや長いが、引用してみよ
う。

世の人、粹といふは身持はうらつにして、色の道のみ心をかた
むけ、はてはあみがさに紙子姿のころぼうが事をいふとおもふ
は、大き成心得ちがひなり。全左にあらす。粹といふ粹の字、
淳をといふ字なり。何事にも人にあらそはず、そやしにのら
ず、身実体に持、家職をわすれず、忠孝を専一として、諸人の
心を合し、すもふずきにはすもふの咄にてもてなし、芝居ずき
には役者のうわさを評し、何百人の中でもおめず出過ぎ、上に
立人をうやまひ、下成人をあわれみ、我をわすれず、里通ひも
よきほどにゆきて、太夫、白人はもとより、花車、中居、大壺

持、料理人、小女郎、おはりや、とひまわし男までもてはやされ、諸わけをしり、いさ、かも野卑なる事をいはず、好まず、人のいたみに成べき事をつ、しみ、優美なるをこそ、本淳とは言なり。(第五) (句読点は私に付した)

ここに描かれた粹の姿が『つれく／＼ 酔か川』と近似しているのわ認め得る。『曾古左賀志』は一代記風に書かれており、この二作は構成こそ違うが、粹論の類似に加えて、表現や内容においても『曾古左賀志』の存在を思わずにはいられない箇所が『つれく／＼ 酔か川』にはある。『曾古左賀志』第一では、一一、三歳となった息子に対して、「少しの芸も覚えさせ、人付逢もはづかしからぬ様に」と考えるのは「親仁は若ひ時からかせきのみにか、り無芸なれば」。一方、『つれく／＼ 酔か川』では、色里狂いの息子をいさめるのは「文盲な親父」(一一②)。第三では『つれく／＼ 酔か川』と同じく、徒然草五段の久米仙人の話が載る(なお、久米仙人の話は『風俗粹談義』でも引かれる)。第四では「げい子が三味線箱をだんはしこの口まで取次、女郎の用場尋れば火そく見せてやるありさま、心からと言ながら、あさましき事共なり」とあるのに対し、『つれく／＼ 酔か川』に「何がしとかやいひし桑門の。茶屋のだん階子の端に三弦箱の退てあるは。余所ながらも気毒な物じやといひしこそ。さもおぼえぬべけれ」(三二②)とある。また『つれく／＼ 酔か川』の(一一②)(三二③)(三二④)の話の流れは『曾古左賀志』を連想させる。

また『曾古左賀志』は、明和七年に刷られ、何度か後印されるが、享和四年本には定雅が序文を寄せてもおり、定雅と『曾古左賀志』の関係は深い。

では、もう一方の『風流粹談義』が描く酔はどういうものか。これもまた半紙本、五巻五冊。安永三年刊。雲水坊著。宇治の人であ

る井花が「酔の奥儀を極んと」北白川の白梅上人を訪ね、諸事を取り上げながら酔についての教えを乞うという形をとる。『曾古左賀志』とは異なり、こちらは全体に粹論が散らばっている。まず、一之巻で、井花が「今時の酔くと口きく人。多くは心にもすかぬ事をすいた顔して附合ひ。また他所へ行てはそれをふくりんかけてそしり。何方でも人にすかる、をいふを酔と心得る。」と憤ったのに対し、白梅上人は「しかしへつらふといふ事もまんざら虚と慾とでも行ませぬ。もと実気がなければならぬ事。そこには以心伝心といふ事がある。」と宥め、その上で

附合のよいのが酔の第一でござる。そこにむつかしい事がある。なんでもかんにんの四字が大事じや。今時の人は堪忍せずに短気なを自慢さふに。わしはあんな事よふ聞てはあぬなど云て。りくつこねるをは酔と思へど。こりやなんでもない事気の短のじや。

〈一之巻〉

という。酔とは忍耐強く、付き合いがよいものだという。しかし『風流粹談義』で語られる酔の根本は次のようになる。

酔もまつ其如く。酔じやと思ふ故すぐに不酔になり。能弁へて物をいはずして人の心をしるをこそ酔ともいふべけれ。

〈二之巻〉

元來物ことに行わたりて人情をしるといふを異国には聖人とも君子とも仏とも我朝にては引くるめて酔とよぶ。

〈三之巻〉

酔じやとてみな博識でもなければ。物しらぬながら世の人情はしりたきもの。人情さへしり得れば博識にもおさくをとるまじ。其人情を知らんとならば色好むにしくはなし。〈四之巻〉

くどふもく人情をしるといふが酔色の第一。 〈四之巻〉

一再ならず書かれてるように、『風流酔談義』のいう酔とは人情を知ることなのである。そして、女に好かれるだけではいけない。

何にせよ男にほれるる、といふ男が酔でござる。男がほれねば女もほれぬ。ほれさそふと思ふとはやほれぬ。とにかく万事気味合を呑込事じや。 〈一之巻〉

『つれく酔か川』では周囲の全ての人、親にも好かれるのが酔であった。人当たりのよさについては『つれく酔か川』でも求められているが、その先は異なる。

過ぎたるはなを及ばぬながら人の心をくみ取ていやみならぬやうに有たし。こゝろづよいが武士ではない。心よいのが酔でもない。何となく少しは気味わるがられるやうに身は持なすべき事。 〈四之巻〉

そして細かなことも見逃さないようにして、粗相しないようにすることも必要だという。

ちよつとしたことでも気を付て倉卒に見過ぬやうに心がける。是を智恵つかひといふて。非我のやうにいへとも。物に籠想の

ないやうにとこゝろがけるは誰しもありたき事。又全体人表にも拘る事。元来まつ行状を慎むが大事じや。是が酔門の入口でござる。 〈一之巻〉

さらに他人の価値観を認め、自分の考えを押し付けけないこと。

その様に人をみな非にみて。偏屈にわがすく場処へ誘んとおもふはすぐに不酔なり。五色各其色ありとて。其好所にしたがふべし。 〈一之巻〉

芸事については、しつかり身に付けた上で、玄人ぶらないのがよいという。

何事も得と師にしたがふて学ぶが酔の芸なり。くろとじこみにならふて心持はしろとにてあるべそ。心もちがくろとで芸がしろとではゆかぬ事。覚てゐてもわすれてゐるが酔の印可。しつてしらぬ顔してゐると。しらずにしつた顔するとは。水玉となすびほどちがふ事。諸芸の事は何てもかやうにかたづけて。己がこのむ所を何なりともなすべし。芸はいたるといたらぬとに甲乙あれど。成就して見れば何の芸も酔のたよりとなる物なり。小道といへどもかならず見る所有といふ。 〈三之巻〉

かくのごとく、『風流酔談義』と『つれく酔か川』との間に「酔」に関しての明確な共通点は、見当たらない。同じような点について説きながら、きれいに重ね合わせることは出来ないのである。むしろ、『風流酔談義』で描かれた酔から意識的に離れようとしているようにさえ感じられるのである。もっとも『風流酔談義』の五之巻

には「酔の会所」である四条納涼の様子を描き、『つれ／＼酔か川』へ②でもまた納涼、そしてその日の茶屋の姿を描くなど、趣向における類似点が無いというわけではない。定雅がこれら二作を意識した上で創作していったことは疑いないが、この二作の扱いは全く違うのである。『つれ／＼酔か川』における酔のあり方に関しては、『曾古左賀志』の影響が強いと読みとるのが妥当であろう¹⁵。

では、『つれ／＼酔か川』における定雅の獨創性はどこにあるのか。そしてどの点において評価され、再印されるほどの人気を博したのであろうか。それはおよそ次のようなものと考ええる。

(一) 酔は決して手の届かないものではなく、誰でも身につけることのできるものであるとの主張

(二) 具体的に実践可能な振り舞い方が描かれていること

(三) 客だけでなく、茶屋に対する苦言も書かれていること

心がけの内容自体は既存のもの模倣に過ぎないのだが、心の持ち方次第で誰でも酔(人)になれるとハードルを下げ、読み手に親近感を抱かせるのだ。さらに、そうした心がけのもと、茶屋で気をつけるべき点はどこにあるのか、芸妓との付き合い方はどうするべきなのかを仔細に、具体的に提示する。つまり本書は、読み物でもあり、また花街での振り舞いを描いた実用書でもあり得たのである。そこで、本書がただ理想を無闇に並べ立てただけの本とならなかつたのは、(三)の視点が備わっていたからである。たとえば(四)②、「何事もふるきよのみそしたはしき」と徒然草の二二段をそのまま引いて、歌や言葉についての論を展開するが、その際、「芸子の義太夫ぶし語さまも。いにしへはなき事にぞ。」という。そのほか、「けやけき替言葉いふにはまさりたれど。妓芸子の口から。失礼近晩なども。女の情にあらねばこれもいむべし。」と誠めるのである。(五)①では、「見てくれ」を気にする客を穿った上で「されば見

呉さま／＼の中に。当世は昔と異なり。茶屋の亭主の茶の湯このみ。廻しの女房が生花好。置屋の隠居が例年和尚の。説法聞に往る、まていづれよき事に似て大方は見てくれの名利に落べし」という。こうした視点は、定雅自身が実際に茶屋に通い、身に付けたものである。一説に拠れば、度重なる遊興の末、家財を蕩尽してしまったとも伝えられる¹⁶。現実の場に取材されてこそ『つれ／＼酔か川』は類書とは少し異なる評価を得たとも言えるだろう。そして、その鋭い観察力は、定雅がこの後に発表する洒落本や俳文にも生かされてゆく。これについては、別稿を期したい。

註

1 定雅の生年は未詳。藤井紫影「江戸後期の京阪小説家(『江戸文化研究』所収内外出版大10)に「文政九年八十三歳にて没し」とあるのにより、逆算した。

2 『当世ま、の川』は内題。題簽には「(酔)ケ川後編」真々の川」とある。本稿では、内題をもってその題とする。

3 『つれ／＼酔か川』は、『洒落本大系』(高木好次編纂、六合館昭5)巻五、『滑稽文学全集』(古谷知新編、文芸書院大6)巻十二、『洒落本大成』(洒落本大成編集委員会編、中央公論社昭56)巻十二に翻印されている。

4 談義本の歴史、色談義ものについては中野三敏氏「談義本略史」(『田舎荘子・当世下手談義・当世穴さがし』新古典文学大系81岩波書店)を参照。

5 題簽は天明三年の奥付をもつ京都大学頼原文庫本と蓬左文庫本、祐徳稲荷神社中川文庫本(ともに国文学研究資料館蔵マイクロフィルム)をあわせて検討した。また本稿で本文を引用する際は、祐徳稲

- 荷神社本によった。なお、引用の折、通用の字体に改めたが、清濁、句読点は原文のままである。
- 6 『足毛識』は、初篇のみ定雅の著作。しかし完全な形で伝わる初編は管見にして知らない。そこで今回はやむを得ず、『足毛識』の改題本である『(旅中骨稽) 脚栗毛』の初編(蓬左文庫本の国文学研究資料館蔵マイクロフィルム)を参照した。
- 7 浅野三平氏「西村粹川子」(『近世中期小説の研究』(桜楓社 昭50)所収)。
- 8 龍草廬については、中野三敏氏「龍草廬」(中村幸彦編『近世の漢詩』汲古書院 昭61)、同「草廬昼錦」(『江戸狂者傳』中央公論新社 平19)に詳しい。
- 9 たとえば安永三年序『多ぼし桶』(美角編)に収載された「山寒し折に一むれちる紅葉」、同年序「片折」(白居編)に載る「月の後霜にしつけし夜の秋」、同年刊「幣ぶくろ」(藤つ、し思へは夏の初メかな)などに始まり、同五年序「張瓢」、同年成「写経社集」、同年刊「続あげがらす」、『仏の座』、六年序「仮日記」七年序「封の儘」、天明元年序「浪速住」など、安永から天明にかけての諸集に収められた句が再録されている。
- 10 定雅の兄美角の歿時については拙稿「安永期における美角・定雅の俳諧活動―西村定雅年譜攷(一)―」(『語文研究』一〇六号 九州大学国語国文学会 平20・12)を参照されたい。
- 11 近世における徒然草の影響について、とりわけ滑稽な作品における徒然草の模倣について、中村幸彦は「元禄の世代の俗文学の一端に、粹法師としての徒然草の著者兼好像を作つてしまつたのである。粹道の方面の随想で、徒然草に名と様式をかるものがつゞく。吉原つれづれ草(宝永六年刊)・徒然時勢粧(享保六年刊)・吉原傾城つれづれ草(元文二年刊)・徒然酔か川(天明三年刊)・つべこべ草(天明六年刊)」といい、『つれづれ酔か川』もこの流れにあるものと指摘する(中村幸彦「徒然草受容史」(『国文学解釈と鑑賞』二二巻 一二号 至文堂 昭32・12)のち「中村幸彦著述集」第三巻 中央公論社 昭58)
- 12 徒然草の段数、引用は、慶長一八年刊古活字版烏丸光広本つれづれ草を底本とした古典文学大系『方丈記・徒然草』によった。
- 13 浅野三平氏「西村粹川子」。
- 14 『(当世)曾古左賀志』、『風流酔談義』は、それぞれ『洒落本大成』補巻、第六巻に翻刻されており、本稿での引用はそれによった。
- 15 この点に関して、浅野氏は次のように書いておられる。「ところがこのように「粹」を論ずるのも、この作品より九年前の安永三年に、同じ上方の地で出版された『風流酔談義』の影響が極めて強いと言える。」その上で『風流酔談義』における酔論のうち、付き合いがよいのが酔の第一、男に惚れられるのが酔という箇所を抜き出し、「前述の粹川子の「粹」とよく似通っている。このようにして「酔談義」が西村粹川子の若い頃に読まれて、彼の「酔か川」を作る基礎となつたことは疑いない。」定雅が『風流酔談義』を読み、無意識だとしてもその影響から逃れられなかったであろうとは考ええるが、これまでの指摘の通り、作品上の直接的な影響は、やはり『風流酔談義』よりは『曾古左賀志』との類似において顕著だと言えよう。
- 16 「定雅はみすや針の一族で相応な資産家であったが、遊蕩のため産を破り、中年知恩院門前に退隠して、俳諧と戯作とで口を糊するに至つた。」(藤井紫影「西村定雅」(『江戸文学研究』所収)